雲古田川梅柳新書

六

13
1300
6 止

墨田川梅柳新書巻之六〇

東都　亭主人著

本清

十五　因を説果を示す楊柳塚

斑女前ちなの夜さぐら梅稚の墳墓小對して。さんざ念仏しく。ゆれば夜の既ふ深さぐら。帰雁稀小飛ぶ行客の腸を断ち。朝水岸を洗て。旅泊の枕を驚ふ。星落ちく漁火遠く鐘度ち春鷗翁く。今往古未筑春秋花開紅葉散ち。流水委む間ち。觀ぶれば夢の世路ちの夢ち。弥陀仏ささと唱ぬ小。怪しいちな。忽地墳の下小声あり。ちくの夜ちも小念仏をあち不審ちく口代鉗ぬ。彼念仏ち忽地止又弥陀仏と唱ぬ。弥陀仏と唱ふとの墳のぬ〜ち。誠ちと疑惑ぬ。眼前柳の蔭小朦朧と。ちあ〜ちれ〜ち梅稚ちち。斑女前ちとちちく。流ちく浪泉のどく。逆縁の回向ち。迷の雲の ちおはひ。煩悩の浪高ち。ちく真如の月ち影も

見ど。聞けりあは聞け道を呻吟ぬふらん。農莫くり紅ぶつの高影
今こに去ぐしもるるどうをしけとく。携ちよくまく志ぬ京立とうえて糸遊の
くくけまぐ小引もほど梅雅ままこしまりぞけく不孝のみ先ぐちまわうせく
れ歎のをあまう深くうえさをあが痛しくれば因果の脱ぐるけ道理をちらし
まうしこあ小ふけ断しまくぐやとく。假小空蟬の売をふしく見え行ぬのを
夫生前小無智の凡夫も死しく神霊とうくとけ。過去を知覚しく来来残明察
を借惟まうろ家三代忠義篤實小しく或ハ薄命小係ア或ハ独危小面く
くの甚故あり。口長くれど少ぬへむくしく高倉院の第安年中小天下早魃して
奥鼈ハ泥小吻け行くハ野小斃る時小ふぐ曾祖神祇史ト部朝臣惟永とのひし
人奏ちくく行ハ武藏國豊嶋郡俄茅ガ原小沈あり。之この沈の上小ありくる
松と梅あり。両樹の枝水の上小さしくそのれ小三ツの亀甲ハ鐵のぐく。腰ハ銀小似さ

るあり。ぺくこの亀を焼て卜筮しく。又その血を剣と鏡小飾しく。龍神を祭祀ぬくく
立沈小雨ふべしく。蓋剣の秋ハこれを臓月小表しく。鏡の秋ハこれを望月小表す亀
ハ北方の神小しく。玄武と稱ちるこれちり。夫玄ハ水。北ハ陰。月ハ純陰の精小しく。
宜陰雨をいさきべしくとちうけ。帝諾ひぬひ。相國清盛小仰く。俄茅ガ沈の美亀を
捕しぬぶ小此ちる彼三ツの亀。惟永の夢小ふまくく苦しく去今度の旱魃ハ清盛
暴虐小しく。臣ぬ君を凌ぐの象ちり。系後しく言を謹ん。行を改め君を嚴
忠を竭さば。禱ぎしく雨ありちん。抑ふぶ後彼沈小栖を殺千年。且法紀の為小
焼ぶんいそら悲しく。ぐるべけ鼻速小美しくえとぶ後を救ひぬるぎいそ
崇児孫小及のべし。強く一言を告く。救を徴む。とのちと坂りハ。愕然とうく夢ハ
覺ぬ。惟永半信半疑く。心いちぐ決ちる小。沈の日武藏國人三枚の美亀を進り
しぶ已と紙ぶど。良久小二面の鏡と一振の刀を作らし。彼亀を焼くト筮しく。又その

紅涙
柳
寒魂
因縁

血成鏡と刀小畏るく鑄雨まるる。雨を降らるる三尺萬物甦生し。諸民歡樂
もさる程小惟永朝臣一時小面目を施ともいへども夢の告を信ずるをば彼短刀
小自他平等昂身成佛のしの文字成鐫つけさ。鏡とも嵯峨の亀山
ちる。百寺小寄進せ。を平基盛清盛の子まず僧小購得く秘藏し。その子
左馬頭行盛小付し。今の鏡と短刀これ。ちるふ次の年。惟永朝臣過あらく
官職を止し。剰その身も隨く世を去ふれば。祖父惟通弱冠より彼此を
漂流し。治承のむしやゆ。くび落ちち帰るく。左馬頭行盛小扶助とされ。文治
元年。八島の敗軍小。行盛彼鏡と短刀成惟通小与く。孤を托せ。より。此両種を
うるどーてつぶ家小ふくりを授く兄弟と稱し。鏡小因く夫婦とちるこれ亀の
崇いよく児孫小及へ元張本ま。一期の禍福これが為小釀せり。且淺草が沈の
三樹成摸しる。鏡の背小鑄ちる。松と梅とい同胞の松稚梅稚が栄枯小係り。

又自他平等の短刀を惟永昊場へ寄進ととへども。遂小その舊小返ること先人
惟通行稚を出家せんと欲すれども隨ひど。梅稚を法師ませんと欲されども
来さんその名さ亀と呼べる毒婦の為小ふるが家をふさく祥ふ。彼昊
亀の崇ふこの故小我小德行あ也ども衰へ彼小悪行ありども栄ふ。是因果
の道理小あるべしや。且祖父惟通内侍所を救ふ功小ふくるる。一旦
家成奥しぬひしとちるどもさべて鏡の因縁を引きられども曾祖の餘殃を祖
父と父との修善小贖盡し。彼亀今ハふる家の護神ともちる。兄君をとるべし
く父の仇を報ひ家成奥しめべし。今生小善を修ちる人い来世小人その善
を返し。過世小悪をちせし人い。今生小人その悪をちと忠臣用ちと。太子の不幸
ちるも憤るべるべ。すべく貪富得失をそれ一生のるとしく世を憤るいとの見
挾し賢才の人薄命ちるとも。過世あるるとちひくいよく善るを修さど

子孫い必ず果べし。さるかようく盛景亀鞠すが一朝小威勢を得るも怪しむ小足こそどこれ併彼ホ今生の積悪未世の報を俟ぞその欲もろ所大ろ必ちろりこうが毋こづくく悟く。煩悩の絆を脱離し。衣を墨田河乃墨染小更く。世を浅茅ヶ原の草の門ま厭ひろぐ〜象教小ん心を委ねたまひ自他成佛の誓むろ〜かぐ〜どと告をろり墳の後小のるとらんく風小拂ふ柳の露の霏くと顔小ゆりかく〜小驚ひ見えぬ(いと)假寝の夢ろりくろそのとひ斑女前つ。〜やく因果の道理を冊昭し。寔小梅稚いこが乃の善知識ちろくとおばせーろば。天明く後仲圓阿闍梨小松稚丸并小以下の人々小夢見し首尾を物くろ速小尼とちろく。浅茅ヶ原小住果んとろろ〜ひ告ぬ小衆皆彼因縁をゆくちく感悟しさそらの映危。一世の浮沈小あ〜ず。月日いろぶ乃照らしぬるとひ小。天運循環しく果達遠ちしざるを志

るこのりくとど殺びあつりる。かくと斑女の前い梅稚丸の新願忌日小。仲圓阿闍梨の示ろとちくと剃髪し。法名妙亀尼とちる。衆し盛い過ぬと散もをろ〜ぬ花の姿を墨染の袖小うえぬ。いと殊勝ある菩提心ぞ〜。既ろ大念佛も。供養結願ド初小。次の日妙亀尼い。人々小送られて浅茅ヶ原小到り。況のろくをえぬ小。打の二樹も松ろ〜果く。昔の木ぐちちるぐく あるとど梅い枯ろん迹ちち〜。是も二人のるぐもらぶ果枯を示ととぶほ〜ろかくぞ口遊めひろる。

あも〜世をこだいの松小風せく ちろ〜の梅いくちや枯ぬる

くもぐろこぶ併ちかろん浅茅が沈小水ぐ〜見ろく

何処小ろ住べ花と残〜ぬ小況小そ〜く。近ろ小ぐ〜法師が締ぎてた

ちく草巷めろろ。これ究竟ちめりとく。松稚丸い。粟津六郎軍ぬ小

小仰く。里人小彼空庵に購ひ。俄頃小蜘蛛網に拂ひ。蔦布すらーーるぐー
く尼公を入れまゝ〻ひとり。走りて小いとゝ怪うん〻。鶯小裏皆泥のほとり小立
立けるとに松稚の携へあひし。松梅二面の鏡。自他千等の短刀ともおのゞ
く〻地小跳入り。水中より一道の白氣隱々と立昇て。西へ空引く消うる
られをくるものの駭然そーく驚嘆とその時仲圓阿闍梨裏人小對く。つ〻く
縁故を案ずれば件の鏡と太刀。原水徳の昊物なりとて。厚懼あて
彼鏡の。野火を滅とめる奇端をゞを見あらるゝ。又ーく人間小留ゞ
なるの小ゆゑ。物小終始あるゝとの本あるゝ。ゆゑ〻もかく。例多ー。需ゑ章
が大阿の劍陳仲躬が夷則の鏡。られとのゞゞ。夫猶豫を決ー。姙蜜を辨
ずるを。亀鑑又亀鏡とつ。ゆゑ〻今そに来らゝく。見閑さるとゝろ羊点
の疑念ゝー。ゝられゞこの地を鏡が地ともゞゞ〻ゝ。頗小稱讃〻ゝゞ

松稚。并小以下の輩ゝさゝゝ。尼公もげふと點頭ゝ。ゞゝ鏡が地の妙亀尼と
物ゝも聖日つけゝゝーとぞかゝゝゝゝ。仲圓阿闍梨ハ二人の徒弟を招く。敵
山小ゝゝゝゝの。ゝに粟津六郎ハ。松稚丸小ゝゝゝ。君。松井源五を討ゝ
ゝひ。軍奴亦盛景が間諜者を殺ーくゝゝ。ゝゝく洛の制度を変うゞと
いゝゞゝ。この処ハ世界が小便ゝゝゞゞ。ゝく陸奥へゝゝゝ。松稚丸
ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝ。盛景ハ既小曉得
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

玉女前祝髪
妙亀尼と
法号し禿ぶ池
の畔に草庵を
徴めふこ終
松梅の明境
自他平等
宝剣水中へ
跳り入終る
迹をくらまし

月林寺に帰てゆひくるゝ。そこに亦山田三郎光政といへる夜梅稚丸に親子を。栗津六郎と委ねゝく平尾の宿りを落しまわらし。毋春雨が白骨鳴崎玉柳が屍をその暁に葬ゝくいとゞかしく家を奪去まづ潛ゝ松井源五がゆを焚くよ。彼源五へ。二級の賃首を推乃ゝく旅宿に帰て。天明くこれをゝる小梅稚丸と呂ひしへ老孤の首ふゝく斑女前も又真のりのふゝねゞ。且驚紀且怒ゝく。ゆゝくび山田三郎が家に走向のとゝくども。光政ゝゆく逐電しゝくその往方をまるのちしよりゝく四方に部そ彼主従を索ゝくゆ。まちゝく嚴重ゝりと風声をそのとゝ紀光政ゝのゆ。斑女に前梅稚君まに栗津六郎が従ひくゝりつる小今に逆に落伸ぬひねゝん呂ゝゆとゝ紀。松稚丸のれゆくへゝゝり。ゝゝふゝゝく彼君に環會。郷導しく追ゝゝゝ

妖亀尼が梅雅丸枉死のこゝろ。忍の摠太が松雅丸軍めくこゝろ。松井原五を討とりしその日摠太を殺しこゝろ。梅雅の仇を報ひめしこゝろ。仲圓阿闍梨。粟津六郎。浮草伐紅ホがこゝろ。且遺言ふきうでこゝろ。梅雅を墨田川原の南出崎なる柳の下ふ葬サて。彼幽塊の告ふよろこゝろ。鏡と短刀の縁故を知て因果の道理を曉りこゝろ尼とさうこゝろ。この沈の思ひとり小住果んとそこひあの。一件のこゝろを首よりの尾まこゝろ。おちもきこゝろ物語めい。光政ハやくこゝろ。王柳が故をめこゝろ。柳の下ふ葬られんと宣ハセこゝろ。光政が生前の面目まこゝろ。女児が死後僥倖きうとこゝろ。不覚ふ感涙ふむせびさて浮草ふ對ひて。思ひもうけめ再會をよろこびやえ。只顧軍めが伐気を嘆賞こゝろ。伐紅ふも名告つて會。おこゝろ梅雅丸の墳墓ふきうりこゝろ。その夜ハ伐茅が原の草の菴よ来こゝろまこゝろ来を語りあこゝろ。詰朝浮草伐紅ふ尼ゑの伝抱を叮嚀ふ頼おいこゝろ。妖亀尼ふ身の暇をヤこゝろ。松雅丸ふ追つ紀はこゝろんとこゝろ。西を望こゝろ立出こゝろ。されども洛ちる紀深山ふ歩をくこゝろんと宣こゝろ。その往方も定こゝろこゝろ。只あふを限ことおもひ究こゝろ。大和河内伊勢伊賀摂津丹波の山こゝろふこゝろけ登こゝろこゝろ行ふ。その年ハ既ふこゝろ。あこゝろ。ふ承久三年の春近江國ふあこゝろ。高峯ことを攀登ある日比良が嶽ふこゝろけ登ふと怪こゝろ。苔を隔こゝろ。頭ふ木刀をうちあこゝろる音。谺ふ響こゝろこゝろ。

其　奸を鋤寃を雪む大團圓

そのとき紀山田三郎光政ハ木刀の音怪こゝろ。正木樵る谷の響きこゝろこゝろ。こゝろる山中ふ。劍法をこゝろこゝろ。こゝろのあこゝろとひとりとこゝろ。こゝろ。こゝろこゝろ。葛の根ふとりつ紀。藤蔓ふ携こゝろ。こゝろこゝろこゝろ。其処ふゆ紀こゝろこゝろふ。

鞍の天狗あつまりて。剣法を試るとて光政いよ〳〵怪をなす。ちり〳〵小立もうれどもなを〳〵見物〳〵ありければ。天狗どもえうへ〳〵大小怒り。者奴ども小悼る気色もなく。却て嘲哢りて。憎ともなき憎むべけれどもの〳〵暴慢の鼻柱打拗ぐられんとて罵て。花石より打〳〵かるを。光政ら潔つ、木刀を奪く。忽地小打〳〵あせばといひどもとの紀もなく。皆ひろ〳〵と走りうるを。光政これを物ともせど。前小挫後小拂ひ。野馬のどく内紀。雲花のどく花を打拂〳〵。左右小従ひ。ひろ〳〵ある石の上小纍圓坐ちて〳〵居ちて〳〵。鞍の天狗ども一帯小引退ぬ〳〵。嘲〳〵び敵とどうけて。偽面を脱捨ぬ。一般の

壮士ら。光政いこの景迹をうく〳〵。悵然とうち笑ひ。木刀を投捨て。松稚丸のほとりちりく〳〵ゆりて。その志を紀をよろこびゆえ。且異紀打拂しぬる。縁由を相語。既小その徒十餘人小及びうちられども。彼ホハ猿骨力の人ハ勝ぬるのうち〳〵。剣法をうち〳〵どそをりて栗津六郎。赤塚軍次とのうち〳〵小件の徒小剣法を教ゆ小至て。藝術ゆ熟ちり。さい央ゆ〳〵事の俊ん多を怕ぬ。いぬる年比叡の辻ゆ〳〵。軍次が天狗とうをちゆ〳〵れを救ひうる吉例小倣ひ。ものく〳〵天狗小打拂ちく。世の疑を避るのうち。夫萬率ハ得易く。一將ハ得難し。今ちり〳〵ど光政てを小来るエ。訪ぶべ〳〵と宣へば。栗津六郎軍次ホも。彼ら同。我を誘りく。別後の會話一朝小盡とべうもあ〳〵べ。

壮士ら。光政いこの景迹をうく〳〵。悵然とうち笑ひ。木刀を投捨て。松稚丸の
ほとりちりく〳〵ゆりて。その志を紀をよろこびゆえ。且異紀打拂しぬる。縁由
を相語。既小その徒十餘人小及びうちられども。彼ホハ猿骨力の人ハ勝ぬる
のうち〳〵。剣法をうち〳〵どそをりて栗津六郎。赤塚軍次とのうち〳〵小件の
徒小剣法を教ゆ小至て。藝術ゆ熟ちり。さい央ゆ〳〵事の俊ん多
を怕ぬ。いぬる年比叡の辻ゆ〳〵。軍次が天狗とうをちゆ〳〵れを救ひうる吉
例小倣ひ。ものく〳〵天狗小打拂ちく。世の疑を避るのうち。夫萬率ハ得易
く。一將ハ得難し。今ちり〳〵ど光政てを小来るエ。訪ぶべ〳〵と宣へば。栗津
六郎軍次ホも。彼ら同。我を誘りく。別後の會話一朝小盡とべうもあ〳〵べ。

山田三郎は長嶽
あくまの天狗と
闘剣法一そくじ
も松稚丸栗陣
六郎軍父
仰まめ

光政いとゞ病ゐおもくして。梅雅丸の臨終ゐあざゝ遺憾いとゝくもべく
妙亀尼浮草ゞ物ごゝろゐ少ゝ。一件のゆをゆ生く。君臣僚友懐舊
堪ぢ。十餘人の徒もひとゝゐ名告あひく。水奥のゆりひをきゝぬ。
ちゝゐ今茲兼久三年五月のちゞ。世の中猛ゐ乱ぢゝ三院
二宮六條ノ宮 遠江島ゐ遷されぬ。縁故を尋ぬ。後鳥羽上皇近曾白拍子
亀鞠をれ寵愛のあまり。摂津國長江倉橋の両荘をゆされ々。ちゝぢど
も地頭ゝれを叫ゝさぢ。亀鞠ゆく憤ゐく。頻ゐ歎ゐゆ。一院後鳥羽関
東ゐ仰遣されいそぢ改易ぢべゐゝ。武制度ぢゝもあゐ。義時朝臣ゆゝる。
地頭職の事。上古いちゝゝを。故右大將家頼朝平家追討の勸賞ゐ。日本國
の摠追補使ゐ補せられ。平家追討六箇年の間。親ゐ討ぢゐ子ゐ撃ぢ。或ゝ
従者を損ぢゝぢゝ。忠勤ゐ勵ゝる。のどゝの勲功ゐ隨ゝ。分ち賜りゝ

る領地ゝを。義時ゞゝゝ入ゝゝく。改易ぢべゐゝ。従ひ奉ゝゝ。
一院ひゝく安ゝゝぢ思食ゐゐ。亀鞠ゝゝ。義時一家を滅。妾
ゞ又赤石判官盛景ゐ武家の棟梁ゝゝゝ。天下のゆ。ゝゝゐ稱
ぬぢるとゐ仰ゝゝく。強くゆぢゝく。祖ゐ。一院れゝゝ決。廷尉
盛景ゐ仰ゝく。在京の武士を相語ゝ。又國々の兵士ゐ召ゝ。盛景いぢゆ
天下の執權職ゐも補せられゝ持ゝく。恍惚と走ゝまゝ。誰渠ゞ家ゝ
ゆゐぢゝく討議をゝゝゐ。在京の武士ゐ盛景ゞ奸佞ゝゝ憎ゝゐとゐ
ぢゝ。院宣遂ゝく呼ゝく。召ゐ應ぢゝゝゐ。光季ゐ討ゝく
ゝく。京都の守護伊賀判官光季ゞ。京極高辻ゝゝる家ゐ攻ゝゝ。
光季終ゐ討ぢゝ。この光季ゐ。義時朝臣無二の人ゝゐ。京都の
守護ゐ居おゝぢゝを。一院忽地ゐ討ぢゐ。蚩既ゐ鎌倉ゐ伝えて。衆

議區とうり。ろうぜども義時朝臣へ。さそ紀ろる気をりろく。相摸守時房義時家
武藏守泰時義時子を両大將と定め。東軍板十万騎を起〳〵。とれをこゝよ
小分ち。五月廿二日の曉方ゝ。洛を望ろく推行〳〵む。ろ〳〵ぶ五月晦日ようり諸処
の合戦もゞ。ろ〳〵。京方敗ろゝ小敗北〳〵。大炊の渡。桃瀬川。蒲原の殺所をも
阿容ととと攻破られ。六月九日あゝ。宇治川をも輙渡さるく。東軍既ゝ洛ろ
入るとゆうこうろ。ゝ吉田松稚丸ハ。今度の合戦京方忽地利をうゝちひて。
事難義ゝなぐろう〳〵。伝へゆ。大ゝ驚紀て。栗津山田赤塚とべくの黨を
集會。父の先見違いぞ〳〵。禍蕭牆の下より起ゆ。朝家の代大ゝ乱紀ろ
あり。松稚勅勘の身ろうとも。推矣〳〵く君の代先途ゝうとまろう。仇人
盛景父子ゝ殺軽ろく。忠孝両ろぐ〳〵全せんと欲と。誘いとげとく。とるりのも取
あてぞ。ゝ勢僅ゝ十餘人主従素肌止安ゝ。ろく。近江路より打ろく出。三條

河原ゝ走著ろう。このとゝ紀日もゆ西山ゝ沿ようれば。松稚主従ハ四辻の御
所へや参らん。又歇軍ゆや懸んとて。殘ようるれ〳〵も。京家の落武者と覚し
きぐ。十騎ゆまり。ゝ足ようろく逃ゆれり。是則別人ゆあ〳〵ぞ。赤石平九郎判
官盛景主従ようろ。この盛景不義の栄利のゝゝゝろゝて女児亀鞠とも小只顧一院ゝ
代隱謀をとくめまり。北條氏を滅〳〵ろく。坊のれ天下ハ勢權〳〵んと較計〳〵。
京方無度敗軍〳〵ろく。宇治川の防御ようれば。盛景ハ猛ゝるの出来〳〵どく周章て。
四辻殿へもゆ〳〵ぞ。戦場より逐電〳〵ろく。家ゝ喪ゝ狗。網を漏〳〵臭ゝ異ようう
ぞ。只一足も落延んとろく。罵あひろく来ゝ。ろ。松稚主従ハられ仇人盛景を
ゝとつんろくられば。吐と嘯く遮ゝ。笛。一騎も漏〳〵さぞ討とりろく。矢庭ろ盛景を
生拘。松稚ハ力ゝ紀その胸前ゝ突つけろく。彼ゞ年来の隱憑を責問ゆゝ小盛景
終ゝ白ゝ状ゝ紀得ぞ。影の江ゆろく伊庭十郎ゝ紀欺紀殺せ〳〵紀ぞゆとろ〳〵。

白川山の假鬼いさゝ。まぐ〳〵惟房朝臣を讒言し。且源五が内通ふりけく。是非を問ぜ〳〵彼人を殺し。今度一院ふやうさゝめく。義時朝臣を滅し。おのれ天下の執權〳〵んと宣るゝ小至るまぐ。父子の奸計悉く白状と。松稚ゆゝくゝ力を放べ。それちほ勅勘の身なるをゝ。くゝ。とゝ伊を殺さど。本院の御所四辻殿小引籠たく。縁由故ゆえあげ。又ゞ忠兄の顛末汝ゞ締われ免を得く後ふ仇を報べ。とゝ〳〵這奴を引立よと下知し。主従頻ふ路をいそぐ。四辻殿〳〵ありあゝ抑三條河原ゝく松稚主従ふ狩れる盛景ゞ十餘騎の従卒わ。去年の春惟房朝臣滅亡のとき。松井源五ふ結ひ。斑女前を搦捕らんとく聞くる吉田の家臣ゝり。神明その不義を憎ゝく。とふその舊の主君ゝ殊さ〳〵ゝり。天網恢く疎ゝ〳〵漏さどとゝ。れ〳〵をやいべきとて。ゆメく〳〵吾を掉ゝ。さゝも四辻の御所ゝ。東軍洛中ふ乱入ととゆえ〳〵行ふ。一院後鳥羽

まゝ琴ゝあひゝその夜さう鳥羽殿へゝをあふべきよゝ。仰ゝく慌〳〵く腰輿ふりゝされ。供の殿上人ゝ。出羽前司重房内藏權頭清範。女房ゝ伊賀局白拍子亀鞠。この四人の外ゝ。従ひまるゝのもゝ。姑射仙宮の玉の床もゝふ限ゝとえゝ〳〵せあひく。叡慮も殊ふ安ゝ〳〵ど。東洞院を下ゝに御幸ゝ〳〵まゝ〳〵ゝれば。朝夕ふ出まゝゝる。七條殿の軒端を外ゝ〳〵ゝ。他道行ゝ〳〵ゝ。維とゝまゝ〳〵ど兵士十人あまゝり。松明をゝりて〳〵。迹を慕く走まれゝ。一院遥ふれ詠んあゝく。あれい行ゝのゝ〳〵んと問せあふ。な赤石判官ふゝやゆゝんとゝ。一院肉食ゝく。げふかゝるとゝふ。一方を切脱く走条らんゝのゝ。盛景ゞ外ふあゝとも。えゝとゝ宣ひく。

迷ひ出る世をゝ〳〵商とゝひゝ月ゝ赤石の浦ふ来ふゝり

とあそば〳〵ゝば。亀鞠。

月影はさとを赤石の浦ろれど雲井の秋はいとほもあ～た。
とよ～も果ざる処ふ、彼兵士ちく走ふり。一人の弱官真先ふもく～生く
れ輿の前ふ頓首し。僅ぐゃりるは臣は吉田次郎惟房が嫡子。松雅丸な
ま。かゝ～とろれど君至尊すの玉體をりそ。賤死りのふ肩を比膝を組を樂し
ちゐひ。后妃采女のみんどちをを囲せゆひく。白拍子をれ寵愛ま～く。
聖王の直ちる政ふ背をく。頻ふ武藝を好せゆひ。侍人盛景。淫婦亀
鞠が舌頭ふ迷されく。忠臣を害し。剰功ゆ～く罪ちを武臣を滅さんと
企おばせ～ろは。天照大神のれ葉と～く。却天神地祇ふ捐らを。日本國中
ふれ。我おりせゆの処ちをだぐ～ふちく～せゆひれ。臣が父これを怙ゝとゆ
ゆ。ふちぐ～練ゝそちろ～ゝと用らをど。己を我ほを亀鞠を殺し～く。君
のゆふ殃の根おんとをるふる成～ど。盛景父子おのれが奸悪の蔑覚ん

る我怕をその是非を問ぞ～く。當せふ惟房を縛～畢ぬ。を我ゆく惟房
は忠心我抱く却逆臣とせ～れ。臣ふが身ふ及く追捕嚴重ろりを。ちを
ども父が忠死の顛末をゆ締んゆふ。一旦深山ふ脱れくゆゆ性命を
たのち。今度の合戦宜軍遂ふ敗れろりと吹くゆく撃を。勅勘の身さ
ゆとゆ。ども推ゆ～く。君の先途をえをまろ。父がす忠を入全せほ～く
イ俄頃ふ走ゆる打～も。三條河原ふく盛景主従が落ゆくを生拘り。こ
ゆを責問ふ彼父子が年来の奸悪。審ふ白状ちり。原盛景は平行盛
が遺腹子ふ。行雅と呼を～ゆ。臣が祖父ト部惟通彼が命を～く。
叡山月林寺ふ登～。聽て祝髪ちを～ゆ～ゆ。彼
山を逐電～て。信濃國の住人。仁科盛遠が猶子と稱～。仁科平九郎盛
景と名告ゆ。鎌倉君ふ奉ゆ～。その後科ゆ～く彼此を追放され。彼

孫なく咎へ上るる。又盛景が孫子小。忍の摠太といふ悪徒あり。去年三月十五日。臣が弟梅稚丸武蔵ト總の堺なる。墨田川の上なく。彼摠太小奇殺さる。臣その日神明の御導きをはなく。立ち出小摠太を殺し。弟の仇敵報ひんと。抑盛景父子三人の暴悪。更小比へなふりのあるその二三箇いなく。如此くなる。箇様くなりとく。伊庭十郎を殺せしる。白川山假魚のなる。摠太が縣の女子を男畧賣らるる。盛景おのれが栄利のなおりとなる。亀鞠と示あはしく。頻小隠謀をかまへしる。まづて白状の趣悉く申えあげ。又ナにやら。君をこめて亀鞠を召るくと。惟房謡顔を犯しく練さそまるるしるど聽めらどまるる小惟房い亀鞠が父城行稚ちりとまるちなる。速小ナ引ざりるる。孝と義の二ッ小絆されるる。一時の迷ひ小似られども。盛景先非を悔なく。舊の仇門とるるんるる。咎ぜ徐ちるるとなく黙止せしを。君まめ取用まるるる。剰判官ちなされしる。小人忽ち小時をはなく。惟房いなく告まるるをはなどるるふるて惟房ハ身死しなく乱逆の悪名をはんとを厭ど。亀鞠盛景を殺して。天下の禍を除んと謀りるる。盛景父子恩を禀なく報ぬ小仇をなすれば ちりその不忠不義校挙る小遑あるど。ぬがるい仰を羨なく盛景ら首を刎ゆべしとなく。栗津六郎山田三郎小下知しなく。縲紲まるるる。盛景ら引出さるるる。亀鞠いのもさるる。一院大小呆れぬるる。忙然とるるる。松稚がナとろ。悉く思食當らるるのるる小。己をを得ぬらど盛景を殊をざるるる。仰まれい。松稚欣然とるるるるる盛景が首を刎。太刀の刀尖小つるれるる。軍ぬ小りるる。又ナんやら。既小盛景を殊るるとのつるし。ちは亀鞠ぬり。彼ハ君を迷るる國を乱るその罪

兼久の
松根地い盛景亀
雪ち旦仙與る徒く
隠岐の國へ出むく

蘇妲妃楊大真ハ勝まつり。ちられば馬嵬驛の故事ハ做らん。ゆゝしび仰を兼ゝ亀鞠が首を刎と。亦一波東軍ハ志ゑ〳〵く。義時波寛ゆべ〳〵と中さ。一院ハ。そのゆいと難義ハ思食く。行とも仰出さるゝ。ちうりゆを松稚丸ちうは理を盡〳〵く。斬らんと清ゆと頻ちられば。出羽前司重房内藏權頭清範ハ。ゆうとも勸るふ。よつゝ。やう〳〵松稚がまうを旨ゆ。まうをゆゝを仰ゆる。亀鞠いこの景迹をつゝく。歯を切り。竊ハ夕告の懐剣波拔うけゝく。君を刼〳〵まゆうせ。身の危窮を脱ゆで。やとゆゝども。ゝゝく色ゆも顕ゆで。名残を惜ゝちゆるおりゝち〳〵く。玉體ハ近つんとゝるハ。忽地ゆの懐ハ声ゆうく。鶏の音高くはえ〳〵ゝ。ゆが松稚吐嗟と跳ゝつゝく。亀鞠を膝下ハ引伏せゝ。夕告の懐剣を奪取ゝく首をゆゝと搔落ゆゝ。粟津。山田以下の郎等。ゝを萬歳をとゝへけゝ。抑ゝの夕告の宝剣ハ。一院當初惟房ハ賜りゆる波。去年の春惟房朝臣宅竊ハ盛景亀鞠を刺んと思ひ定めゝの宝剣を懐ゆ〳〵。一院参〳〵ゆゝゝ。忽地鶏の声ゆうく。松井源五ゝれを怪ゝゝやく。盛景ハゝゝ〳〵れい。惟房朝臣志波遂ゆ〳〵く討れゆゝその時一院。あゝゝゆゝく。彼剣を亀鞠ハ賜ゝ〳〵ゝ。ゝゝ〳〵ハ亀鞠。目今君を刼〳〵ゆゝゝ。おのゝ刑戮を脱んとゝゝるハ夕告忽地声波發〳〵く。玉體ハ近つゝ。ゆゝゝ。松稚丸ハ曉得られゝく。ゝゝもゝの剣波りゝく首を刎らゝを。因果覿面のゝゝゝう。かゝゝゆゝゝゝゝ。これ併松稚の孝心。爰ハ天の祐を得ゝく。父が寃枉を雪め。國の為ハ奸を鋤。家の為ハ仇を撃。有ゝゝかり〳〵績ゝゝり。かゝゝく松稚丸ハ。一院を鳥羽殿へ入ゝゝり。その夜直ハ盛景亀鞠が首級を携ゝく。武藏守泰時朝臣の屯ハ到りゝく。盛景亀鞠

が。好悪。ろぐ。死亡父の孤忠。事審小。演説し。彼首級をさ〜ゆ〜〜とく穂
便のろ〜ひことをあ〜まほ〜〜れとて。七ゆ寛ることと叮嚀ろう。泰時朝臣
縁由をゆ〜〜〜〜その忠孝を嘆美し。盛景父子が首を受とり〜〜
ゆ〜〜件の趣を鎌倉へやるをゆ。ろうれども義時の憤終小解ぜ本院
後鳥羽を隠岐國。新院順徳を佐渡國。六條宮を但馬國。冷泉宮を備前國
へ迸〜〜ゆる。又土御門院い。後鳥羽院第一の皇子ようそいぬる兼元三年の春
三月にて後ろ〜〜ぞおり居さをぬひく。今度一院の皇企ろもかぐらひ
ぬらざるとい。関東よりも兎角の言小及ばどろれども土御門院い人界ろ
生死稟ろと是父母の恩ろう。ろるる小一院配所小ろ〜ゆ〜ゆと死ろぐ分安然
と〜く洛小居らんい不孝ろう。ろれも遠國小住めと〜くのよ〜鎌倉へ
仰つ小されるる程小。義時以下の武臣憐ろゆう。叫ろ〜いカ及つどとて。土佐

國へ遷〜ゆる。ろ〜ゆより先松雅九い直言用ひらるとぞれば〜〜望死ろ〜ゆひ
ろ〜再び泰時朝臣小見んぜ〜〜紂王無道ろり〜を武王天小ろつてこれ
を討。庶民土炭を脱れろう。夫臣と〜〜ろ〜君死討の綸孟軻小至つろ〜ようく
辨明ゆといくども。後世ろほんぶ快とゆぐる歟。彼殷紂い残獨ゆ乱王武王
い蓋世の聖人ろり。さい今をりてその是非をけとべ〜〜ど況ろぐ國い神
日本盤余殃尊神武帝皇統を竹くぬひ〜〜ゆ小百有餘代いまぐ臣と〜
ろ君を謫を事死ゆ〜ど三綱君臣父子夫婦い國の基ろり〜一旦の威勢を
ゆ〜〜。君臣の礼をろ〜ゆひぬらぐ。行をゆ〜〜民死忠孝小道すれぬろん。努ゆひ
ぐまろぬく〜〜〜〜。諫言報刻小及び〜〜ゆば。泰時大小感伏し。ゆさろ〜不悉
く理ろり。ろうあれど。天下の一大事い父義時が豫行小ゆ〜ゆ〜ゆば。弱輩の
泰時いろ〜ゆもとべれゆろ〜〜。四辺の忠顕小おいくい関東へゆ洗決し。

日ちゝぶ。吉事あるべしと回答ぬくべ。松稚丸頭をうち掉く。伯夷叔齊を首陽ハ餓しうつゝぶ直言容也られぎゝく。いとぞう賞を受るの理あらん。只ねがゝくハ。一院の御供しく。隱岐嶼へ赴くるゆ、弧絃しぬくゝを盡く仕ゝとまうす。亡父が精忠を全せんとゆえぬゝ。言の順ゝひ定めうる容ちれば。泰時ますゝく嘆賞し。このゆ仔細ゆゝどと諾ぬひゝ也ば。松稚丸い猿宿ハ退ゝく。一封の書簡を書寫。山田三郎赤塚軍ゝ。武藏國へ赴ゝ。松稚が仙輿ハ従ひまうゝく。隱岐國へ赴く一件のゆを。母ゝ姉亀尼ハまうし。粟津六郎ハ。月林寺ハまうゝく。仲圓阿闍梨ハ情由を告ようとゝく。ゝくそのゝを伝ゝ。又比良が嶽より従ひ来る十餘人の壯者を召ゝく賞しゝく。おのく身の暇をあり。粟津山田赤塚ハいゝハ。やども一人も従ひぬくゝを洴さび。別を決しく生ぬゝる行ハ一院ゝく。

義久三年七月十三日ハ。隱岐國ハ移され。海部郡苏田郷ゝる。あやしゝ庵ハ。入ゝぬひゝく。

我こゝを新島守よ隱岐の海のあゝゝ浪風とゝゝゝゝけ

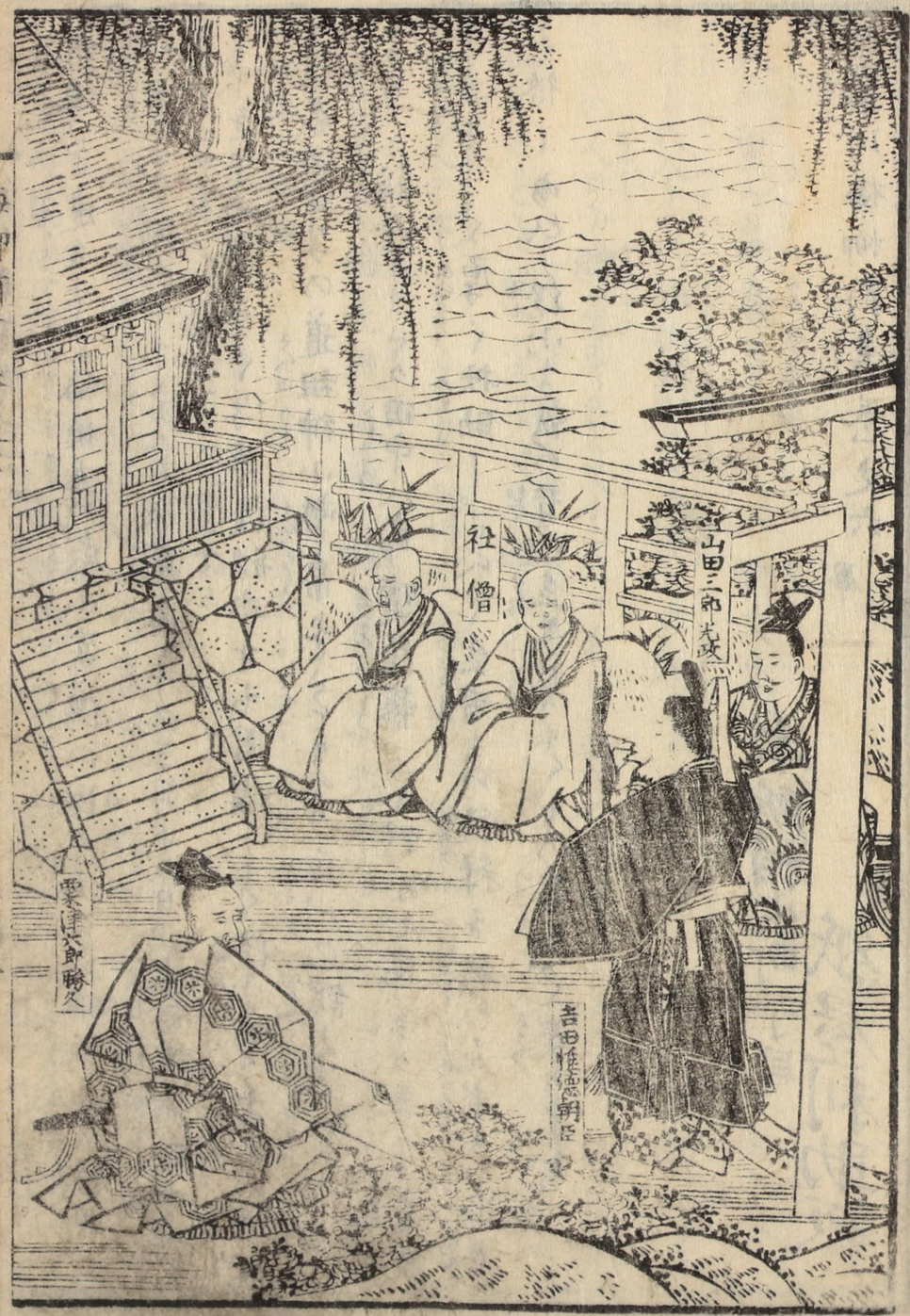
かくあゝぬゝられつゝよ伝づ叡慮を傷しぬの。形ちゝ鄙の住居ハ。松稚丸ひとりゝ力を竭しく。慰め冊ゝ。常住也外れほゝり弧去とゝ。一院ハ頻ハ惟房朝臣の諫言を思食あらされ。ちほ久まも勝る松稚丸の誠忠を只顧御感あゝく。是ハ歳寒しく松柏の後ハ凋をまゝり。國乱ぬゝく忠臣志を移ざるゝゝる。朕ゝむゝの牙ちゝぬば。洴を重く用べゝハ。そゝらひゝゝとゝいと惜ゝれと宣ひゝく。不覚ハれ衣の袖を濡しぬゝく。松稚丸ハ永ゝハ。感涙をとゞめうれ。且くれ前を退出ゝゝ。ゝくく夥の年を孤ゝく。一院崩御ましくゝれば。松稚丸あゝく悼ゝ

まうれ中陰果く後洛へうり上りぬゝ。帝四條院（兼久三年三院遠國へ遷されぬしかり前懐成）
親王新院順徳帝のれもづりを受させぬゝしうど関東のまうゝひとゝく在位わづう小四ヶ月
まゝしく推おろしまうり。高倉院のれ孫茂仁親王を位小昇まゝゝ。後堀河院とまうこの
君在位十三年まゝく位秀仁
親王小位くぬ四條院これまうり。その孤忠絶孝を感じおぼし。父祖の舊領り加
恩の莊園数箇所をまゝぬうゝく。ずゝく三位小まられしうば松雅丸終
小絶る家を良ゝく。君恩を拜謝しまうり。是より〳〵吉田三位
惟徳と名告ぬゝ。粟津山田赤塚られゝの老黨いゝもさまうり。
十餘人の壯士もこのゝを伴ゆ。衆皆処くより走まうりて欲ぶを限ず。
今茲仲圓阿闍梨八十餘歳ゝ迂化しぬひぬ。よて惟徳朝臣いらば一日も
まゝく母玄妙亀尼を迎まゝぬゝせんとそ。勝久光政軍ゆホを打く武藏國
へ下向しぬゝこの序をゝく。梅雅丸を一社の神小祭ゝんる成奏し
まうり。日数行ゝく淺茅が原ゝる鏡沈菴小到着し。慈母の恙ゝ丸を欲

ひ又その老暁ぬゝるを悲ミ十とセ小あ年る起小を冠り向れりく洛へ
伴ひまるべ丸乃小。下向まうゝを供えぬゝ小尼玄一切らけ引ぬゝぬ
ゝれ今れ身が忠孝を全ゝく。世小生ぬゝをえるゝ小一日も生延んる
成願いど。殊小年末の宿願を遂ゝく。明日い西方極樂小至らんとそ。何
の是あゝく咨へ上るべ丸と宣ひゝが果ゝく次の日浴ゝく新ゝ丸袈裟法
衣を著礼盤の上小結跏趺坐ゝく。念佛數声唱つ。大往生を遂ぬゝ。
辞世の和歌あり。

あゝく小ち丸たまちゝび末の世を。守らんと坐りふ人の子まぢも

惟徳主従哀悼小堪ず。遺言小従く。鏡が池のゝとうちる丘の上り
葬つもぬ。今の妙亀山これその墳墓ちりといふざるあとぶ惟徳朝臣を
先考先妣春雨。鳥崎。玉柳ホグ追福の乃小墨田川の南出崎小一宇の


社僧
山田二郎太夫
雲津六郎勝久
吉田惟忠朝臣

松雅九叙爵し
惟徳と名告り武義
國へ下向しく姫亀丘
小祥祠し且梅雅九の
亡魂を一社の
神と祭りの
梅山文殊羅現
従者
赤塚軍次

道場を建立し又梅稚丸ハ叡山寄偶の因もあるとハ梅稚山王権現と神号しるく柳の下小宝倉弘建爲年の三月十五日小大念佛供艱あるべ[illegible]を定めおけるさく浮草浅舩ホをもゐ俱〳〵洛ふるり吉田の神社と比叡の辻子の道祖神小幣帛をゝそなゆる白川の舘と志賀のほとゝくく討死しるる田中八郎鹽屋藤三大野小七郎ホが妻子眷族を索生しるく厚く扶助し。さべく生者るハ秩禄を釐ひ死者るハ追善を修〳〵ぬと〳〵経小よ[illegible]ぐ昔小ゑ[illegible]るく。その家るぐく栄るとぞ。

墨田川梅柳新書卷之六 畢

本所相生町二丁目
紙屋利助板

附録

或人問。叟が毎歳著ところの稗史。さべく鳥有先生小托しるく勸懲の捷径とん。今ゝの梅柳新書も。亦その類るべし。梅稚のゆゑつゝ淫曲小侍るとも るく世の人口小膾炙せるゝと久し。ゝるゑども婦るく物小ゝるゑるを[illegible]ゑ。叟何小据るくゝゑを倣る。余答るく云。梅若物語本といふりのあり。今罕小侍ふゝゝ中葉の人の筆るゝところとおぼし。角田川の淫曲ハこれより出るるべし。亦万里居士が梅花無盡藏小梅若のゆを論ぜゝ。この外小所見るし。但秋夜長物語小梅稚のゆゑゝゝ。ゝるしるく世小傳るゝところと遥小異るりゝて小抄出しるく後人の批評を俟のゝ。

秋夜長物語小云。後堀河院の御宇。西山の膽西上人りとハ北嶺東塔の衆徒。勸學院宰相律師教戒とゝう。教戒いさゝるゝゝ山を

生く他ふ住んと〜るるがさとを〜醍醐王山王の結縁もまそぐ〜く。同坊同侶の
〜るれも名殘を〜くく。あ〜〜ふしるるがあるとれ石山ふ七日ありて通夜まて。
その夜れ夢ふ美女人をつ〜く。とろふ忘まどうられあり〜ふ。三井寺の邊
ま〜く雨ふあひて。聖護院の御房の庭ふ立よれり。ま〜くるところふ二八ばかりの美
女人花をまふ折〜〜ま〜〜居〜り。見の三條京極ふ住ある花園左大臣
の子。梅若とまをまてぞあり〜る。律師が夢ふ〜〜るおりげふまとも〜もぶ〜〜ば。
い〜〜ぶひま〜〜り〜。かの女人のつ〜る童をる〜〜ひ。文をおろ〜られば女人その
ふをあられを。律師を招〜く一夜あひ〜〜これより後律師。山ふ〜〜ても猶
悲慕のところ〜まど。御〜まづ〜〜く〜〜ふ〜〜ろ。梅若此ふ〜をゆ〜〜ふ人
ま〜〜〜〜〜ぶ〜〜ん絃を問てもらひ〜〜たとひまられ山路ありとも。〜〜ぶ
ひんとふひ〜〜ち。童一人を倶〜〜く出られども。あ〜〜ちまとれ道ふつ〜をと〜。

辛崎の松れ〜げふ〜まら〜ひ。あ〜れ天物ぞ〜まろ〜〜ともふれをと〜く比叡山へ〜て
のぶ〜〜〜〜ぶ〜〜ぶの所ふ年〜〜ける山伏ま〜〜ぶ〜ぶ〜〜〜〜〜〜ひ〜れぬ梅
若〜〜〜〜〜〜

修行もとあれば武蔵國墨田川の畔ちどふりくまく痩たるしふ柳を栽
その後叡山の因ふ山王権現と祭ることもあり。されど秋夜長物語といひども男
色雞群らたる説どもを輯録せしものなれば。これを本説とも定めがたし。
蟠龍ないせふ愛護若のこと。彼長物語の梅若ふ因く似う段るものく
とこそ。余が往ふ著しる俳諧歳時記梅稚塚大念佛供、艱の條下ふこれ
らの説を引ど彼書ハ倉卒の際ふ稿じをりしぶ考ひしるもの多り。
亦向都鳥ハ伊勢物語業平の歌ふ名ふたをりく世俗墨田川ちこでい
ちたる鳥ことなりて。墨田川ちこでも。都鳥をよくるる百ぶあり。答く云。
都鳥ハ彼川ふ限らず。外ふも鞍よりめり。八雲御抄よ。ちと鳥ハもと川ちこ
らぐ京ちたる川ふもありとちこ〜ぬこりどもの多既ふ蟠龍ないの辨ふ審ちり
その古歌左のごし。

後拾遺集ふ和泉ふぐりわりくふ。都鳥のほのふ鳴れがよめる。和泉式部

とこぐありのまふ〜みやこ鳥ちこのゆをつまふかちせよ

ちの歌家集ふもええちり。又古今著聞集。安倍内侍の寄ふ

春ふあるそろや花のちと鳥のどけたる代のちやとなれ

十六夜日記ふ。ちちぐ川ちこありとぢ〜ちど。都鳥といふちのちこ〜とあ〜と

あちたハ此ちち〜相撲ふもありちとありちく。阿佛。

とちこむはとあ〜ちたいちぐ〜ちぐ住ちるのちと鳥ちと

頓阿草庵集雜

あれちち〜花や雛鳥のちと鳥今も堀江の川ふ鳴ちり

蟠龍ないち頓阿が歌をりしちりぢほこの外ちあるべ〜。

亦向木母と稱る寺ハ梅若の梅といの寺を分ちりとおぼ〜ぢられども梅ち

毋ハ似タル毋ハあらず。毋ハ梅のハ栂なり。木毋を梅とするハ。たゞ一なる説
あり。答て云。伝説辨ハ湖海新聞を引て曰。北朝山濤字致遠赴召宋神
宗問曰。卿自山路来云云上曰自山路来。木ハ木毋如何。濤云。太公正儀
歳木毋正含春。木公松。木毋梅也。稱吉除中書

今按ずるハ。梅あるひハ梅を栂といふ。栂音い南説文又爾雅繹木等
ハ云云。史記貨殖傳ハ江南栂梓を生ずとあるも梅のことゝ。母と毋と字
形相似たり。拜を毋ハ悞るハ毎を毋ハ悞るハいまゝ考るべし。また梅を
木毋と稱するハ。後人の杜撰なり。その稱未だ既ハ久し。栂ハ和俗字歟。
字書あいなくてるとき。木毋精舎の名目ハ梅若の梅といふ字を分たんと為るハ推量の説なり。梅ハ因て
名つけたる。神宗梅を木毋とするハ別ハ故あるべし。

右無用の辨ハ似たれども。聊或問を附録し。好古君子の一噱を
備ふ。余が管見ハ僻説なるべし。この書亡丑の冬。十二月上浣を
終て草を起し。今茲丙寅正月下浣稿を脱す。おゝ年の七月
廿三日。更ハ校正ほゞ。巻のをハりハつけ畢。

蓑笠隠居

田舎居琴義堂蔵書

飯台曲亭翁嘗所著之稗史文思奇絶義理深致乃擇畫者而圖之擇剞劂而刻之繡梓既成翁手親校正葢曲亭翁家號瀧澤名解字瑣吉別號著作堂亦稱蓑笠隱居世人呼爲馬琴子本房毎歲得其所著以刋布翁著述最多僅録十之二三呈教云尒

曲亭主人著編題目　仙鶴堂識

○戲子名所圖會　已未冬出　全三冊
○小說比翌文　癸亥冬出　全二冊
○復讐奇譚稚枝鳩　甲子冬出　全五冊
○四天王剿盜異録　乙丑冬出　全十冊
○墨田川梅柳新書　今年新版　全六冊

○墨田川梅柳新書畫者剞劂人目次

繡像　葛飾北斎筆　彫刀

剞劂　源井末補刀

文化四年丁卯春正月發行

江戸本町筋通油町

書肆　鶴屋喜右衛門